## TOPICS

# 国際開発学会第22回全国大会・国際シンポジウム開催

教授・大会実行委員長　大坪　滋

名古屋大学大学院国際開発研究科が開催ホスト校となり、国際開発学会(JASID)第22回全国大会・名古屋大学大会を、去る2011年11月26・27日の両日開催した。国際開発学会は会員数1,900名を数える我が国最大の国際開発・協力コミュニティであり、大学研究者をはじめ公的援助関連機関、民間開発コンサル、その他民間企業、政府関係者等の研究者および開発の実務家が集う学会である。当研究科が本大会のホスト校になるのは3度目であるが、10年ぶりの今回は当研究科の設立20周年事業の一環として大会招致をするとともに、国際シンポジウムを一般公開として当研究科で進行中の国際開発の中核的研究プロジェクト(国際共同研究)の一端を紹介した。この名古屋大学大会は当研究科内に設置した大会実行委員会(実行委員長大坪、事務局長藤川清史教授、事務局次長伊東早苗准教授等総勢10名)を中心に企画・運営したが、学会員350名余、公開国際シンポジウムへの一般参加者が70～80名と合計420～430名の参加をみて、東京以外で開催された本学会の全国大会では過去最大のものとなり、発表セッション数、発表者数は過去最大という大変盛大な大会となった。

大会の共通論題セッション(Plenary Session)として一般公開で開催された国際シンポジウム(英語セッション)“Diversification of Development Goals under Globalization: Perspectives from Asia, Africa, and Japan”では大坪が総合司会・問題提起役を務め、海外招待パネリストを中心に議論を行った。パネリストを務めたのは、「国民総幸福」で有名なブータン王国の王立ブータン研究所所長Dasho Karma Ura、「足るを知る経済」で有名なタイの国家経済社会開発委員会のMs. Paranee Watana、および第2次世界大戦後サブサハラアフリカ諸国の中で最初に独立を果たしたガーナのガーナ大学からProf. Yaw Asante(アフリカ独自の開発論を展開)であった。それぞれが各国独自の開発思想を紹介し、今後多様化する世界の中で開発の目的をどのように捉え直して行くのかについて活発なオープン・ディスカッションを展開した。

また、本大会に先立つ11月24・25日両日には大会プレイベントとして科研費補助金研究(基盤A:代表大坪)による国際共同研究ワークショップ"Controlling the Impact of Globalization on the Poverty-Growth-Inequality Triangle: An International Comparative Study“が大学院国際開発研究科で海外6カ国15研究機関の共同研究者の参加を仰いで開催された。国際開発学会の上述の公開国際シンポジウムはこの国際共同研究の活動紹介も兼ねて行われ、パネリストも同国際共同研究ワークショップの参加者から選出された。

大学院国際開発研究科、環境学研究科、医学研究科等の教員の活発な発表参加に加えて、本国際開発学会においてはこれら研究科の博士後期課程院生の発表も奨励されており10数名が研究発表の機会を得ることとなり、多くの若手研究者に学会デビューの機会を供与する事も出来た。

本大会開催を通し、アメリカ一極集中から多様化する世界の中で、異文化相互理解の理念に立脚し、アジア独自の開発モデルの構築を進める当研究科の重要性が改めて再認識されている。気を引き締めて今後とも国際開発研究・教育に邁進して行きたいと、実行委員各位は決意を新たにしているところである。